様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８２６２２
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３２００４６

研究課題名（和文）装飾とデザインのジャポニスム―西欧におけるその概念形成と実作の研究

研究課題名（英文）Japonisme in Decorative and Art Design-Its Formation of the Idea and Execution in the Occident

研究代表者
馬渕　明子（Mabuchi, Akiko）

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・その他部局等・館長

研究者番号：３０１１４６５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　14,600,000円、（間接経費）　4,380,000円

研究成果の概要（和文）：３年間で英、仏、ベルギー、独、スペイン、米における装飾とデザインのジャポニスムの研究を行った。この研究課題は、今まであまり取り組まれてこなかった装飾とデザインというマイナーと見做されてきた分野を扱うとともに、西洋人の日本観を知るためにジャポニスムの言説に関するものも研究対象としている。その結果、各地での特色の相違はあるものの、装飾とデザインにおいて、日本における「自然主義」「工芸の高い評価」「優れた技術」「生活に密着」といった点が高く評価され、それまでの西洋になかった新しいパラダイムが誕生したことを確認することができた。

研究成果の概要（英文）：During these three years, we have studied on Japonisme in decorative art and design, mainly in Great Britain, France, Belgium, Germany, Spain and the United States of America. This assignment dealt with decorative art and design which Japonisme studies had not seriously worked on, because this genre was considered as minor art. We also analyzed the discourse in Japonisme writings how the European people saw the Japanese culture.In conclusion, despite differences in area and country, Japanese "naturalism","high rank of craft art", "outstanding technique", and "closeness to daily life"were highly estimated in Occident.It means that a new paradigm which Europe and America had not known was born with the knowledge of Japanese art and culture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：ジャポニスム　装飾　デザイン　工芸　アール・ヌーヴォー

１．研究開始当初の背景

1980年ころからジャポニスム研究は、日本を中心に具体的な作家や作品研究において深まりを見せてきた。分野においてもいわゆる美術に限らず、文学や音楽、建築、ファッションなどにおけるジャポニスムが研究されている。いっぽうで、現在までの研究はあくまで個々の芸術家、制作者におけるジャポニスムを生涯と作品を通して検証するという方法が主流で、そのため芸術家、作例は豊富に挙がってきているが、その社会的背景や日本美術がどのように把握され、社会の中でどのように定着してきたか、の研究はきわめて少ない。

また、ジャポニスムに関する言説として、近年19世紀の欧米の書物、論文の復刻が進んでいる。エディション・シナプスから刊行されている復刻シリーズは、かつて入手が難しかった文献を身近なものにした。そのため、これらを細かく検証することで、新たな側面が開けてくる。以上のように、研究のベースとなる先行研究や資料はかなり揃ってきており、さらなる調査と資料収集によって、次なる発展が期待されるのである。

研究代表者馬渕と研究分担者高木、池田が現在遂行している科学研究費基盤研究(B)「染め型紙のジャポニスムへの影響に関する研究」(20～22年度)において、西欧の美術館などに収蔵されている染の型紙が、装飾産業の推進のために利用されてきたことを解明した。これによって、日本の優れた技術と表現が、西欧装飾産業に新たな継承の場を得たことが判明したが、それがどのような装飾とデザインの理論を生み出したか、それによって建築空間をも含めた広い意味の装飾活動がどのように展開されたか、の検証はまだ行われていない。

今回の課題は、フランスの装飾理論の専門家である天野知香と、連携研究者として建築史家の鈴木博之、壁画装飾研究の手塚恵美子を迎えて、新たな成果を目指すものである。

２．研究の目的

19 世紀後半において西欧芸術文化が日本美術のさまざまな表現方法、美学、思想を吸収して自らの近代化に役立てた「ジャポニスム」という現象については、絵画の分野では今日多くの研究成果が蓄積されているが、当時から重要であった装飾芸術やデザインという、生活のなかで使用される分野の研究はきわめて少ない。その発展の背景には、当時の各国の装飾工芸産業のありかたと密接に結びついた政策があったことが知られている。このような活動のなかで、日本美術のどの点が評価されたのか、それによってどのような概念が形成され、それがどんな作品を生み出す契機になったのか、「装飾」、「デザイン」という言葉の意味を探りながら、明らかにしてゆく。

３．研究の方法

初年度である平成 23 年度は、まず全員で研究会を開き、担当の分野で取り組むべきことを確認した。そのうえで、国内外で必要な文献資料を収集し、各地において作品の調査を行った。馬渕はパリ装飾美術館を中心に、天野はフランス国立図書館で、高木はロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館を中心に、池田はベルリンのブレーハン美術館、ハンブルクの工芸美術館を中心に調査を行った。

平成 24 年度は 12 月の国際シンポジウムに向けて、各自調査を行い、発表内容をまとめた。馬渕はパリとバルセロナで、天野はパリで、高木はブリュッセルで、池田はハンブルクで調査を続けた。シンポジウムでは海外からの 3 名の研究者、および国内の連携研究者との意見交換を重点的に行い、新たな知見を得るとともに、発表内容の精度を高めるために翌年度に必要な研究の準備を行った。

最終年度である平成 25 年度は、各自昨年度に引き続いて担当の研究を継続した。基本

的には 25 年 12 月 15 日に行った国際シンポジウムでの成果をもとに、さらにその内容を深化させることを目的とした。

馬渕はパリとナンシーにおいて、日本美術品がどのように紹介され、ジャポニスムの言説がどのように作られていったかを現地調査した。その際、今井朋(研究協力者・アーツ前橋学芸員)の協力を得た。また、昨年も行ったスペインの調査を引き続き行うが、本年はとくにバルセロナで「スペインのジャポニスム展」(リカル・ブル教授の監修)が行われたので、そこでの資料収集を中心に行った。

天野はイギリスとフランスで漆の技法がどのように習得され、二大戦間の家具・工芸作家に応用されたかを引き続き現地調査した。

高木はイギリスとベルギーにおける建築とテキスタイル、壁紙などの平面のデザインにどのような原理で日本のデザインが応用されたかを引き続き現地で調査した。

池田はドイツにおけるジャポニスムの発信者であるユストゥス・ブリンクマンの資料をハンブルク等で引き続き調査した。また、昨年のシンポジウムの報告書を本年度前半の成果も含めて刊行し、関連の各方面に配布した。

４．研究成果

初年度である平成 23 年度は、全員が今後の研究に必要な基礎的資料を収集し、さらに幾つかの具体的テーマに絞って研究を進めた。

馬渕はアール・ヌーヴォーの立役者であるジークフリート・ビングの同名の店の指針について研究した。とりわけ彼が 1888 年から 3 年間にわたって出版した雑誌『芸術の日本』における書説を分析すること、アメリカなど外国からの情報をどのように取り入れたか、の検証をおこなった。また、この時期に日本美術がどのように市場に出回ったかについてコレクションの売立てを検証し次頁の図書において報告した。

天野は両大戦間に漆装飾で活躍したジャン・デュナンを中心に基礎的な研究を進め、フランス国立図書館等において当時の批評を中心とした文献資料および作品を調査した. また当時の室内装飾において輸入品を含めた漆作品が使用される例を定期刊行物等を通じて調査した。その結果デュナンの作品は、それまでの日本の漆作品の模倣とは異なり、両大戦間フランスの装飾芸術を特徴づけるモダンな特質が注目されたこと等が確認された。

池田は日本美術・工芸の普及に寄与したハンブルク工芸博物館の館長ユストゥス・ブリンクマンのもとで働いたふたりの人物、日本人の原震吉とフリードリヒ・デーネケンを中心に調査した。ハンブルク工芸博物館に保存されている原の出張記録を閲覧することで、当時の各地の工芸博物館における日本美術・工芸品をめぐる状況を調査した。またドイツ工作連盟資料館では、デーネケンとヘルマン・ムテジウスの書簡を閲覧することで、日本美術・工芸品が近代デザインの発展にどのように寄与していたかを調査した。

高木は日本の造形を伝える媒体であった染め型紙に注目して、一般大衆が理解した日本を翻案する消費財としての英国のジャポニスム、それを最新の装飾芸術として需要し、前衛美術の要素としたベルギーのアンリ・ヴァン・ド・ヴェルドの例を調査し、2012年4月に刊行される『KATAGAMI Style展』図録で発表した。

平成 24 年度は、12 月に予定されている国際シンポジウムの発表に向けて各自調査研究を行った。

馬渕はパリ装飾美術館およびオルセー美術館資料室において、1900 年前後の装飾工芸デザイナーによって、日本美術がどのように応用されたか、彼ら自身あるいは周辺の言説で日本美術のどの要素が応用に値すると考

えられていたか、を調査した。

天野はパリ装飾美術館や国立図書館において、アンリ・デュナンやアイリーン・グレイといった漆を用いた工芸作家がどのような技法を用いて、どのような美学で作品を制作したかを調査した。

池田はハンブルクにおいて 1890 年代の工芸美術館の館長であったブリンクマンの論文の分析や、工芸デザイナーのオットー・エックマンの作品調査を通じて、日本美術の応用の美学と実践を調査した。

高木はブリュッセルの建築・工芸家が日本のどのようなデザインの要素を用いて建築装飾を行ったかの調査を行った。12 月のシンポジウムでは英、米、西の研究者を招へいし連携研究者も含めて 10 名の発表を行い、世紀末から 20 世紀の欧米で日本美術を参照した多くのジャポニスムの装飾とデザインの例が示され、各国、各美術家がどのような視点でそれらを制作し、その意義はどのようなものだったのかの分析が示され、多くの専門家との質疑討論が行われた。その結果を更なる調査研究にフィードバックして、翌年度の報告書の刊行に向けて精度を高めることになった。なお、平成 24 年度は調査館の都合で、予定していたナンシーでの調査が先送りとなった。

最終年度である平成25年度は、馬渕は、前年度からの繰り越し分の調査をナンシー派美術館(ナンシー)、およびラリック美術館(ヴィンゲン＝シュル＝モーダー)において、今井朋(研究協力者)の協力を得て行い、ナンシーのガレ周辺において、日本美術の収集や模写が積極的に行われていたことを示す資料を収集した。また、バルセロナの特別展「スペインのジャポニスム」展で、今までほぼ未開拓だったスペインでも、多くの装飾工芸家がジャポニスムを展開していた資料を収集した。またパリの装飾工芸作家、ファリーズやヴェヴェールの活動を調査した。

天野は前年の国際シンポジウムで発表した内容を元に報告書掲載論文として「アール・デコ期における漆装飾ジャン・デュナン」を執筆し、両大戦間におけるジャン・デュナンの漆のあり方と日本との、複雑な関係の様態と特質を明らかにした。

高木は上記の国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」で「ブリュッセルのズグラフィート装飾にみる都市型住宅ファサードのジャポニスム」について発表した時に提示した課題を研究するため、ブリュッセルの近代建築アーカイヴ、ブリュッセル自由大学図書館、王立図書館にて、関連資料を調査した。

池田は、ドイツにおけるユーゲントシュティールならびにジャポニスムの代表的作家とみなされているオットー・エックマン(Otto Eckmann,1865-1902)を中心に研究を進めた。彼の仕事の変遷を追いつつ、それに伴う主要な美術雑誌・新聞における彼の作品に対する批評の言説を「自然」および「日本」という観点から分析した。

全員が前年のシンポジウム内容を論文にするため、精度を高める調査研究を行い、その成果をシンポジウム報告書で発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　７件）

①馬渕　明子
¿ Qué aporto el Japonismo?
展覧会カタログ Japonismo La Fascinación por el arte es japonés,(Caixa Forum, Barcelona/Madrid)
無
１
2013
33-44

②馬渕　明子
リュシアン・ファリーズのジャポニスム―その理論と「メゾン」の作品
『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』
無
１
2014
63-76

③天野　知香
アール・デコ期における漆装飾―ジャン・デュナン
『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』
無
１
2014
91-106

④高木　陽子
ブリュッセルのズグラフィート装飾にみる都市型住宅ファサードのジャポニスム
『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』
無
１
2014
107-118

⑤池田　祐子
ドイツ世紀転換期の装飾とフォルムに見られる日本と自然に関する言説―ユーゲントシュティールの盛衰とその背景―
『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」報告書』
無
１
2014
119-136

⑥馬渕　明子
『芸術の日本』―新たなパラダイムの誕生
『芸術の日本―ジャポニスムの系譜第８回配本』別冊付録解説
無
１
2012
3-14

⑦天野　知香
「他者」をめぐる交錯するまなざし―里見宗次と『オリエント・コールズ』
美術フォーラム
無
23
2011
128-132

〔学会発表〕（計　４件）
①池田　祐子
『Dekorative Kunst』誌とユーゲントシュティールーマイアー=グレーフェとムテジウスを中心に
日本独文学会秋季研究発表会『シンポジウムⅣ「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相―その多様性の根源にあるものは何か」』
2013
北海道大学

②馬渕　明子
リュシアン・ファリーズのジャポニスム―理論と「メゾン」の作品―
国際シンポジウム『装飾とデザインのジャポニスム』(日本女子大学主催)
2012 年 12 月 15 日
日本女子大学

③高木　陽子
ベルギー・アール・ヌーヴォー期のズグラフィートとジャポニスム
国際シンポジウム『装飾とデザインのジャポニスム』(日本女子大学主催)
2012 年 12 月 15 日
日本女子大学

④天野　知香
アール・デコ期における漆装飾―ジャン・デュナン―
国際シンポジウム『装飾とデザインのジャポニスム』(日本女子大学主催)
2012 年 12 月 15 日
日本女子大学

〔図書〕（計　４件）
①馬渕　明子　他
三元社
三浦篤監修『往還の軌跡―日仏交流の 150 年』のうち「型紙とナンシー派」担当
2013
60-76

②馬渕　明子、高木　陽子、池田　祐子、長崎　巌他
日本経済新聞社(三菱一号館美術館、京都国立近代美術館、三重県立美術館)
『KATAGAMI Style』展図録
2012
381

③Mabuchi Akiko
Musée des Beaux-arts de Nancy
Préface : La collection de Charles Cartier-Bresson et le Japonisme in *Un goût d'Extrême-Orient, Collection Charles Cartier-Bresson*
2011
10-11

④馬渕　明子
エディション・シナプス
「パリの日本美術コレクションの売り立てについて」（別冊解説）『フランス人コレクターの日本美術売り立て目録』
2011
18

６．研究組織

(1)研究代表者

馬渕　明子（MABUCHI, AKIKO）
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・その他の部局等・館長
研究者番号：30114656

(2)研究分担者

天野　知香（AMANO, CHIKA）
お茶の水女子大学大学大学院・人間文化創成科学研究所・教授
研究者番号： 20282890

池田　祐子（IKEDA, YUKO）
独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・研究員
研究者番号： 50270492

高木　陽子（TAKAGI, YOKO）
文化学園大学・服飾学部・教授
研究者番号： 60307999

(3)連携研究者

手塚　恵美子(TEZUKA, EMIKO)
日本女子大学学術研究員
研究者番号：10339484

鈴木　博之(SUZUKI, HIROYUKI)
青山学院大学総合文化政策学部　教授
(平成 23 年度)
研究者番号：00011221

粂　和沙(KUME, KAZUSA)
日本女子大学人間社会学部助教
研究者番号：20634900
(平成 24 年度より)

(4)研究協力者

味岡　京子(AJIOKA, KYOKO)
お茶の水女子大学大学院人間文化創生科研究院研究員

今井　朋(IMAI, TOMO)
アーツ前橋学芸員　(平成 25 年度)